

テーマ 人はことばをどのように処理するのか

適用分野

言語処理、あいまい性の理解、解りやすい日本語の作成、英語の理解



研究名称

文法依存関係のオンライン処理に関する研究

氏名所属

中谷健太郎 教授
文学部 英語英米文学科

内容

●特徴

文を読んでいる間に、人間はどのような処理を行っているのか。特に主語・述語、動詞・目的語、修飾・被修飾といった文法依存関係のオンライン処理についての研究を行っている。このような研究が進めば、文章の解りやすさ・解りにくさを科学的に解明したり、コンピュータ言語処理などの分野に利用しうると考えられる。

●研究内容

視覚または聴覚情報である言語に接すると、人はまず頭の中のレキシコン（心理辞書）を参照して語の意味を理解し、文法の知識や文脈の情報、さらに談話の状況などを加味して文の意味を計算する。

しかし、文法的に誤ったところのない文でも、解りやすい場合と解りにくい場合がある。そこには様々な要因が絡んでいるが、例えば作業記憶の影響が一つ考えられる。身近な例でいえば、主語と述語の間が離れすぎていると文章の意味が解り辛いという経験は誰でもあるかと思うが、これは主語を脳の

作業記憶に留めて、述語が出てくるまで保持する際、述語がなかなか出てこない、作業記憶に負担がかかってしまうためだと考えられる。将来認知心理学と言語学、さらには脳神経科学との学際的な研究が進めば、文処理のメカニズムが解明に向かうだろう。

このような研究は、英語圏で先行しているが、SVO言語である英語をベースに確立したモデルがSOV言語である日本語の話者に当てはまるのかなど、この分野で日本語研究が貢献しうるポテンシャルは非常に大きいと考えられ、文法依存関係の確立が作業記憶とどのように相互作用するのかを日英語話者を比較しつつ解明していきたい。

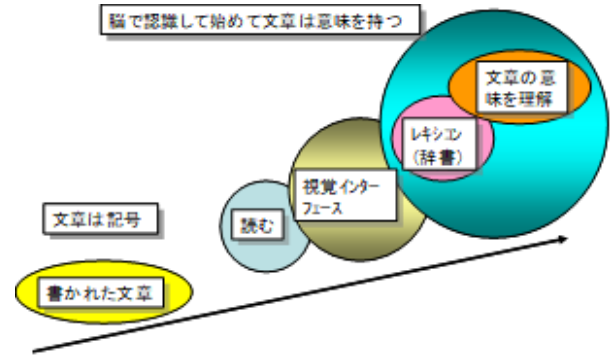


図 ヒトによる文の理解の流れ

キーワード

言語学、認知心理学、作業記憶、あいまい性、言語処理、レキシコン

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメントート ■ 共同研究